

隙間に立ちあがるもの

—ノイズ・ノリ・熟議—

綾屋紗月

コミュニケーションを「言葉のキャッチボール」と言ったり、その破綻を「言葉のドッジボール」と言ったりするそうだが、私にとって中学校時代の休み時間の教室は、ドッジボールを上回る「言葉の無法地帯」だった。

バレーボール、バスケットボール、卓球、テニス、サッカー、ソフトボール。見た目も動きもさまざまないくつものボールが、それぞれのルールで狭い教室内を無軌道に猛スピードで飛び交う。若いエネルギーの塊は時々空中でぶつかってはじけ飛び、大きな笑い声となる。それらのめまぐるしい動きに翻弄され、目で耳で、たくさんのボールの行方を追うでもなく追いつけてしまい、酔って吐き気がしてくる。我が身をかすめるボールの風圧で鼓膜や腕の肉が傷む。了解不能の激しいボールが、間違っただけで自分に当たりませんようにと、ぎゅうと体をこわばらせて身をすくめていると、ふいに「じゃあ、あややは？」と、ぽこんと掌中にボールを置かれる。このボールをどうしろと？ 私はどこにどんな投げ方でどのくらいの強さで投げ返せばいいんだ？

ボール投げをしたくないわけではなかった。むしろ切望していた。でもどこの集団に行ってもボールは多くて、速くて、また、扱う時のルールがわからなかった—。

1. 「アスペルガー症候群」と社会的排除

初めての集団教育の場である幼稚園に入った時から、私は集団生活における周囲との関わり方がよく分からずに来た。「くったくのない同級生の輪に入って、楽しさを感じながらおしゃべりする」ことができない自分がとても不思議だった。成長すれば仲間と交わるようになるのだろうと思っていたが、その時はなかなかやってこないどころか、かえって遠ざかるようだった。

また、私はいつもとても疲れていて、その原因がわからないことがとても不安だった。ついに高校1年生で体を壊してからは「社会」と「自分」の双方への「読めなさ」に対する恐怖心が我が身を覆い尽くした。

2006年、自分にそっくりな特徴を持って生活している当事者の手記をきっかけとして、私は「アスペルガー症候群」という名付けを手にした。その時の私には、「自分の“おかしさ”は気のせいではなく、確かに在る」と認められたような安堵感があった。しかしその直後から、この名付けの定義である自閉症の三つ組の特徴、すなわち「①相互的社会関係能力の限界 ②コミュニケーション能力の限界 ③想像力の限界」という専門家の言説に違和感を覚えた。

1990年代後半以降の日本では、あるときは凶悪な犯罪の背後に、またあるときは学級崩壊の原因として、そして最近ではニートや家庭内暴力の原因として「アスペルガー症候群・高機能自閉症（以下“アスペルガー症候群等”と表記）」が注目されている。司法、教育、労働、家庭といった、日本社会のさまざまな領域において、アスペルガー症候群等の概念

はますます広まっているようだ。

自閉症の歴史をみてみると、英米では教育問題・労働問題¹⁾で排除された一群を名付ける形で「自閉症」が提唱されてきたことがわかる。**【表1】**

【表1:英米における自閉症の変遷】

時期	英米の景気と失業率 ⁱ⁾	自閉症の変遷 ⁱⁱ⁾
1940年代 (景気↑)	米国は第二次世界大戦の軍需景気のおかげで1943年にほぼ 完全雇用(失業率2%) を達成。	米国の児童精神科医カナーによる自閉症概念の「発見」。知的障害者から 有用な一群を抽出 するのが目的。
1960年代以降 (景気↑)	英国は高成長を背景に、 失業率1~2%台の完全雇用 を達成。総中流化、学校化社会へ。	知能検査で「教育対象外」と分類された子を持つ上-中流階級の親たちが、我が子たちを「 教育の対象 」と するべく、精神遅滞児の中から自閉症児を抽出 。学問的な自閉症概念の研究が出現。
1970年代 (景気↓)	英国の 失業率は次第に悪化し、3~5%程度 まで上昇。この頃から高いインフレと高い失業率が共存する「スタグフレーション」に陥った。	ラターによる言語-認知障害説が確立。 自閉症は精神遅滞および統合失調症から分離 され、家族因仮説の批判も完成。この説は日本を含めた先進資本主義諸国の研究者や臨床家、そして、自閉症児を持つ家族を席卷していく。
1970年代半ば以降 (景気↓)	第2次石油危機の影響で1979~80年以降欧米各国とも一段と失業率が上昇。 ポスト・フォーディズム体制への移行の中で、求められる労働力が変化し、 労働市場から排除される人々が誕生 。 79年に政権に就いたサッチャー英首相(当時)は、高インフレの是正を目的として金融引締め策やマネーサプライ抑制策に踏み切る。失業率はさらに悪化し、 81年1月には10%台 に達した。 <米国の失業率> 1970年-4.8% 1975年-8.3% 1982年9月以降-10%超。	1981年 、ローナ・ウィング(英)により「アスペルガー症候群」が提唱。同年、マリアン・K・デマイヤー(米)により「高機能自閉症」も提唱。 正常知能の人々の間にも 、三つ組の特徴(①相互的社会的関係能力の限界 ②コミュニケーション能力の限界 ③想像力の限界)を有する人たちが少なからずいることを明らかにする。 以降、有病率は上がり続け、先進国の中流階級は、 新しい障害者 としてのアスペルガー症候群や高機能自閉症者の 社会内処遇を望む ようになった。

*参照：i) 厚生労働白書 1983, 1997 ii) 高岡健 2007

1940年代に米国の児童精神科医カナーによって自閉症概念が「発見」されて以来30年、好景気でほぼ完全雇用(失業率約2%)を達成している時代は、知的障害者や精神遅滞児、教育対象外とされた子どもたちの中から教育効果を期待しうる自閉症児・者を抽出する、という名目で自閉症概念は用いられていた。

やがて1970年代半ば以降の不景気の時代には、ポスト・フォーディズム体制への移行の

中で求められる労働力が変化し、労働市場から排除される人々が誕生した。そして英米の失業率が約10%となった1981年、ローナ・ウィング（英）により「アスペルガー症候群」が、マリアン・K・デマイヤー（米）により「高機能自閉症」がそれぞれ提唱された。この時、正常知能の人々の間にも、先述の自閉症の三つ組の特徴を有する人たちが少なからずいることが明らかにされる。以降、有病率は上がり続け、社会は、新しい障害者としてのアスペルガー症候群等の名付けと処遇を望むようになっていった（高岡 2007）。

一方、日本では、自閉症（カナー型）については諸外国での広まりと同時期の1960～70年代に輸入されたが、1980年代のアスペルガー症候群等のブームは諸外国での広まりと同時期に到来してはいない。それらへの関心が急速に高まり始めたのは、英米から遅れること約20年、少年犯罪をきっかけにしたことであり²⁾、豊川市主婦殺害事件(2000)、長崎男児誘拐殺傷事件(2003)、石狩・同級生の母刺殺事件(2004)などにおける精神鑑定の診断結果では、加害少年が軒並みアスペルガー症候群を有していると指摘されている（木村 2008）。

以上のように、「アスペルガー症候群」には社会から排除される人々への名付けを背負ってきた歴史がある。しかしそこには、そもそも「社会性とは何か」「そこで想定されている社会とは何か」については不問のまま、「社会性に障害がある人」として原因を個人に帰責できてしまう、定義上の問題が見て取れる。そのような定義だと、あらゆる社会的排除が正当化されうるだろう。「社会」や「コミュニケーション」は人と人の間で生じる相互行為であるにもかかわらず、そこで齟齬が生じた時、私ばかりが悪者になってしまうのはおかしい。

2. 総自閉症化する社会

このような歴史的経緯を振り返った結果、私はいまの「アスペルガー症候群」の定義によって正当化された社会的排除の実態を明らかにしたいと思った。そのためにまずは、「アスペルガー症候群」等に押し付けられた、外面のみから判断する定義を書き換える必要があった。

2008年、拙書『発達障害当事者研究』（医学書院）において、私は「社会性やコミュニケーションの障害」とするこの定義を一度脇に置き、あらためて、自分の中で何が起きているのかを著した。そして私は、私の症状を「**身体内外からの刺激や情報を細かく大量に拾いすぎてしまうため(選択肢の過剰)、意味や行動のまとめあげ(縮減)がゆっくりな状態。また、一度できた意味や行動のまとめあげパターンも容易にほどけやすい**」と再定義した。

人間の脳には五感を通して外界から、さらに内臓や筋肉などの身体内部からも、常に大量の情報が送り込まれている。私たちはその情報の一部を文脈に合わせて絞り込み、そこに意味付けをし、特定の行動に結び付ける。この一連の過程がゆっくりであるというのが私の一次的な特徴だと結論したのである³⁾。

また社会的排除の実態を明らかにするためには、このように私個人の特徴について改めて定義すると同時に、「社会性の障害」と言っている際に当たり前に前提とされている「社会」が、いかなるものなのかに目を向ける必要もあるだろう。

過去約半世紀を振り返ってみると、世界中のいたるところで、人と人、人とモノの関係の在り方が、ある特定の方向に変化してきた。

三種の神器に象徴されるような耐久消費財が、先進国の中産階級にいきわたると、世界経済は慢性的な需要不足と安価な労働供給の不足に直面した。それを乗り越えるために企業は、商品に対して表面的な差異化をほどこして、新たな需要を開拓する必要に迫られた。新たな買い手と安い労働力を求めて、変動相場制への移行、そしてグローバル化に乗り出した。また広告は、商品の表面的な差異に大きな付加価値があるという想像力を働かせるよう、消費者を促し始めた。

つまり消費者は、自分がまだ持っていないモノに対する情熱を燃やす一方で、一度手にしたモノはあっさりと手放すような、いわば、「自己消費的情熱」を持って動く主体へと作り直されたのである。

また、次々と新しい商品を生産し続けなければならない企業にとっては、大規模で柔軟性に乏しい生産ラインよりも、その時々の変化に鋭敏に対応して生産ラインが組み替えられるような、柔軟な組織へと編成しなおす必要があった。そのような柔軟な組織に重宝される理想的な労働者の像というのは、変化し続ける職場に迅速、柔軟かつ即興的に適応でき、過去積み上げてきたものに対してこだわりを持ちすぎずに、あっさりと手放せるような人物になっていく。

つまり労働者も、新しい同僚や新しい生産ラインの機械とのつながりを情熱的に求める一方で、過去のつながりをあっさりと切り離せるような主体、熟練した技術を持つというよりは、柔軟で、適応力のある、さまざまな可能性に開かれた「潜在能力」を持った主体へと作り直され続けている。

つまり労働(生産)の場でも、生活(消費)の場でも、ここ半世紀の間に、人と人、人とモノのあいだに生じる関係性には大きな変化が生じたのである。「人と人」「人とモノ」とのあいだにかつては存在した、悪く言えば「堅くて変化に乏しい」、よくいえば「長期的に安定して予測、見通しのつきやすい」関係性はすでに崩れ去り、めまぐるしく配置や距離を変える関係性へと突入したのだ。

そんな中で、将来の見通しや、自分のアイデンティティを与えてくれるような大きな関係性のネットワークも掘り崩され、人々は日々柔軟かつ即興的に、周囲の人やモノと衝動的にくっついては、あっさりと離れることを繰り返す、そんな負荷を課せられ続けるようになってしまったのである。

1960年代以降生じたこのような変化に、ついていくことができる人は多いわけではない。現代の個人は常に、「みずからの人生の物語を即興でつむぎだすか、あるいは、一貫した自己感覚ぬきの状態に甘んじなければならぬ」になったのである。セネットは、ほとんどの

個人は、そのような変化にはついていけず、傷を負わされていると指摘する。

われわれのほとんどは、「短期的なものに順応させられ、潜在的能力だけを評価され、過去の経験をすすんで放棄する」人間ではない。「人生の持続的な物語を必要とし、特殊なことに秀でていることを誇りに思い、みずからの通ってきた経験を大切にする。ゆえに新たな組織に不可欠な文化的理想は、そこで生活する人々の多くを傷つけているといってもよい」。

このような、現代人が抱える生きにくさは、「身体内外からの刺激や情報を細かく大量に拾いすぎてしまうため、意味や行動のまとめあげがゆっくり」という私の生きにくさと、同質のものだろうと、私は考えている。現代は、私が新たに定義したような自閉的傾向を多かれ少なかれ誰もが持つようになり、身動きがとれず立ちすくむ時代だとも言えるのではないか。このことを、具体的な経験に即してもう少し詳しく見ていくことにしよう。

3. 「わからなさ」の語り直し

①ノリの秩序の蔓延した社会の中で

大学に入学した段階で、既に私は「新卒一括採用」という方法では就職できないと感じていた。その最大の理由は、「自らと集団との関係のわからなさ」にあった。中高時代の教室を占拠していた、あの“読めない”集団と私との間にはいったい何が起きていたのか。それを再考する時、「ノリに乗れない」ということがキーワードになってくるように思われる。

個人を取り巻くモノの配置がめまぐるしく変わり、共有するルールを喪失した現代では、「予測し得ない応答＝ノイズ」が生じやすくなっている。そのため多くの人が、その場その場ですばやく、しばしば無根拠に、情報を取捨選択し、「即興のルール＝ノリ」を創発させる必要に迫られる。さらにいじめ研究の第一人者である内藤によると、学校や企業を初めとした現在の日本社会のあらゆる領域において「刻々と動いていく『いま・ここ』の雰囲気のリハリ（ノリの強度）が、そのまま個を超えた畏怖の対象となり、規範の準拠点になる」＝「ノリの秩序（群生秩序）」なるものが蔓延しているという（内藤 2009）。

セネットによれば、グローバル化した近代において先端企業組織で新たにもとめられるようになった理想の人間像のひとつは、新しく配置された先でもすぐにメンバーと仲良くなり、即興的に協調性を立ち上げることにある。まさにここで述べた、「ノリの秩序」そのものと言える。そのような人間像が必要とされる企業は実際にはわずかだが、その理想像だけが独り歩きし、多大な文化的影響をもたらした（セネット 2006）。そのため多くの人が、その場その場ですばやく、しばしば無根拠に、情報を取捨選択し、曖昧さにはあまりこだわらないことで「即興のルール＝ノリ」を創発させるようになったと考えられる。

なるほど、そう言われると、「こんぶ?」「こんぶ。」「こ～んぶ♪」「こんぶう～!!」と「昆布」だけで会話を回してげらげらと笑い転げていたかつての同級生たちの様子が思い出される。会話のお作法も意味もわからない当時の私は「あの『こんぶ』をこっちに投げられたらどうしよう」と怯えるばかりだったが、あれはまさに『ノリ』で回っていた会話

の最たる例だったといえるかもしれない。

実はノリに乗れている人たちも、必ずしも意味がわかった上で乗っているのではないことを、1年ほど前に初めて知った（綾屋^他2009）。それでも彼らは「ノリからはずれた意味が分からないノイズ」をそれと判断した上で無視して、ノリの維持を優先することができるらしい。そこが私と決定的に違う。

私の場合、ノリでまわす会話で生じる、大量のノリからはずれた意味不明のノイズを無視できず拾ってしまう。そして、意味付けできない鮮明なノイズのまま記憶が蓄積され、帰宅後、無秩序に頭の中で再生される「フラッシュバック」で同級生の表情やセリフを見せつけられながら、「あれはどういう意味だったのだろう」と悩まされ、消耗していくのである。

もっとも、私は“いつなんどきも”場のルールを共有できない訳ではない。変化が緩やかな慣れたモノとの関係や、暮らしを共にしているよく知るヒトとの関係においては、急かされることなくノイズを意味付け合うことができる。何年もかけてじっくりとルールを育てる人間関係ならばむしろ得意なのである。

つまり即興的なノリについていくためには、意味や行動を絞り込み、まとめ上げるスピードが求められるが、それには個人差があり、多くの人よりも「ゆっくりていねいに」意味や行動をまとめあげる私のようなタイプ人間が、そのような社会の中で「障害化」していったのではないだろうか。

②「構造化が必要／感覚過敏／虚弱体質」の内実

私の抱えていた自らのわからなさの2つ目は「作業能力の不確か」である。「適当にやっておいて」と作業を命じられる時、確かに普段の自分の感覚や経験から「できるはずだ」と推測されるし、周囲の人も容易に行っているのに、いざやろうとすると途方に暮れてしまい手出しができないことが、私にはしばしばあった。しかしこれも、私が「身体内外からの刺激や情報を細かく大量に拾いすぎてしまうため、意味や行動のまとめあげがゆっくり」なのだという定義を用いれば、作業工程の全体の流れが明確に絞られていないことが原因だったと説明できる。つまり私がフリーズしてしまうのは、いくつかの作業工程の可能性を等価に思いつき過ぎて、選べないからなのである。そしていろいろ思案して時間がかかった挙句、しばしば人々の想定外な行動をして、「ふざけないでよ～」と咎められることになる。

この特徴への対処法は「構造化」という言葉で語られ、自閉症関係者の間では既によく知られている。作業工程やスケジュールを時間軸に沿って可視化し、不安になるたびに確認できる状態にすると、途端に私も作業が進むようになるため我ながら驚く。「普通のようにでいて、自分には何かがごっそり抜け落ちている」「できるはずなのにできない」という、これまで抱えてきた自分への不信感が消えたことは、心身の負担をかなり軽減させた。

しかしセネットが指摘するように、組織構造の柔軟性に価値をおくように社会が変化している現代において、構造化を期待するのはますます難しくなりつつあると言えるだろう。

3つ目のわからなさは「感覚過敏」である。私は人より五感への刺激をスルーさせるこ

とがどうしてもできず、極度に疲れやすいため、できるだけ寝込まずに済むよう周囲の環境に配慮する必要があった。その結果、自分がそこに居続けるために必要な条件が細かく決まってきてしまい、人と同じ場で共同作業をすることが難しくなっていく。

この「感覚過敏」という特徴についても自閉症関係者の間ではよく知られていることなのだが、この特徴が専門家によって自閉症者の副次的な障害として語られる傾向については違和感がある。新しい定義を踏まえれば、これは「身体内外の刺激や情報を細かく大量に拾う」という、私の持つ「根本的な特徴」だと言い換えられるだろう。

最後のわからなさは「原因不明の虚弱体質」である。私は幼い頃から疲れやすく、学校を休みがちだったが、最終的に高校 1 年で体を壊したことが、「集団と同じペースで働くことが当たり前とされる職場では、倒れてしまうので働けない」と思わせる決定的な要因となった。そして当事者研究を始める前まで長年、この「原因不明の虚弱体質」を漠然と私の「根本的な特徴」の一つだととらえて過ごしてきた。

しかし意外にもこの特徴は、「なぜ自分がうまくいかないのか」がわからないままに、人並みであろうと無理を重ねた結果生じた「二次障害」であったとわかった。当事者研究を経て自分の特徴が明確になり、適切な対処ができるようになったこの2～3年の間で、これまで抱えてきた慢性的な具合の悪さの大半がみるみるうちに消失していることが、その証明だと言えるだろう。

4. 社会が障害になるとき

これらを踏まえると、私にとって社会が障害となる条件は「①ノリの秩序に巻き込まれることによる読めなさ」「②活動・業務の読めなさ(非構造化)」「③過剰な刺激(音・匂い・動きなど)」の3項目にまとめられる。

まずは学校生活をふりかえり、【表2】にまとめてみた。3項目のうち、2つ以上そろうとその場にいられなくなり、学校に通えなくなっていたことがわかる。

【表2:学校に通えなくなるとき】

	学校生活				
	幼稚園	小学校不登校時	小学校登校時	中高	大学
① ノリの秩序に巻き込まれることによる読めなさ	有	有	有	有	無
② 動・業務の読めなさ(非構造化)	有	有	無	無	無
③ 過剰な刺激(音・匂い・動きなど)	有	無	無	有	無

*「有」が2項目以上そろう時に通えなくなっている。(幼・小時⇒積極的に行かない/中・高時⇒体を壊して行けない)

*②の非構造化は、指示の要領が得ず、一貫性がなく、且つ支配的な教師が担任になった時に生じた。

場当たり的で雑な説明をされることで授業や活動の見通しが立たず、私を大いに不安にさせた。

次に労働についてであるが、「就職活動」という競争のスタート地点より前で戦線離脱した私は、「果たして自分には賃労働そのものが可能なのか」「だとすればどのような職種や

労働条件であれば働けるのか」を知るために、アルバイトやパート労働等を試行錯誤して、オリジナルの道を探ることになった。その経験をたどってみると、この3つの条件は教育環境だけでなく労働環境についても引き続き当てはまっていたことがわかる【表3】。

【表3:うまくいかなかった労働】

	うまくいかなかった労働		
	教育実習	不動産屋	正規雇用 塾講師
① ノリの秩序に巻き込まれることによる読めなさ	有	有	有
② 活動・業務の読めなさ(非構造化)	無	無	有
③ 過剰な刺激(音・匂い・動きなど)	有	有	無

教育実習と不動産屋のアルバイトは、いずれも中高時代の破綻と同じパターンである。このパターンの時は、業務内容については構造を把握できているので、「仕事の内容は問題ないし、自分でもできるだろう」と思って始めるのに、またもや原因不明で体調が悪くなり、途中で休んだり、辞めたりすることになる。職場の人間関係はとてものなごやかで楽しそうに会話をはずませながらうまくまわっている“良い環境”に見えるので、それが逆に自分の負担になっているとは思ってもよらない(①)。また、大勢の生徒の声・匂い・表情やしぐさ、職場に流れるBGMのせいで作業に集中できなくなる時(③)、そんなことで自分だけが体調を崩すことに悔しい思いをすることになる。

一方、正規の塾講師は幼小時代の登園・登校拒否と同じパターンであり、独断的で一貫性がなく、交渉や確認のしづらい支配的な教師が、そのまま上司に変わった状態だと言える。そのような上司だと当然、作業の構造化ができない(②)。また、その上司によるノリの秩序も職場を支配しており(①)、私は2週間で辞めざるを得なくなった。

その上司がいない教室で子どもたちに接する時は、業務に何も問題がなかった。また、小規模な会社だけれども、初めて正規雇用に応募して採用された職場だったことから、なんとか“大人”としてうまく割り切って仕事を続けたいという思いがあった。それだけに、この程度の上司に我慢できずに体調を崩す自分に、やはり私は大きく失望した。

5. 充実したフリーター生活

うまくいかなかった労働がある一方で、思いのほか調子よく継続できる労働も出てきた。こうして表にしてみると、今度は3つの条件をほぼクリアしていることがわかる【表4】。社会が私にもたらすこれらの障害を無くすことは、甘えや怠惰といった言葉では回収できない、私が労働をこなす上でどうしても避けられない条件だと言えそうである。

【表4:うまくいった労働】

	うまくいった労働			
	バイト塾講師	保母補助パート	ベビーシッター	家庭教師
①ノリの秩序に巻き込まれることによる読めなさ	無	無	無	無
②活動・業務の読めなさ(非構造化)	無	無	無	無
③過剰な刺激(音・匂い・動きなど)	無	有	無	無

うまくいった労働環境では、「職場の上司・同僚」「子どもの親」といった大人たちと私が、ずっと同じ空間で顔を突き合わせて業務（保育・教育）をすることがほとんどなかった。業務内容の確認を行う時のみ事務的、且、綿密に連携をとり、後は各自で業務にあたる。大人たちの間にはノリの秩序で回す関係は生じておらず（①の不在）、また業務内容やスケジュールの相互確認や申し送りが徹底しており、きちんと構造化されていた（②の不在）。業務対象の子ども数は1人～5人であった（③の不在）。

このようないくつかの職種を掛け持ち、自分でスケジュールを組み立てながら、私は嘘のように「働けた」。朝から晩まで仕事を3連続ではしごをする日があっても、休日なしで働き続ける週があっても倒れなかった。「きっと人と関わる仕事なんてできない」と思ってきた私に、「このような人間関係だったら働ける」という環境が見つかったことは、長年の頭上の重石がやっとなくなったような開放感をもたらす、誇らしいことだった。

ただ自分が正規雇用状態でないことに対する負い目が全くないと言えば嘘だった。むしろ自分のペースで健康的に働き続けることができ、尊厳も守られる、こういった充実した働き方が、なぜ、中途半端で能力の足りない人間の証であるかのようにまなざされ、正規雇用よりも社会的に下に見られてしまうのだろうと残念な思いがあった。

6. 隙間を作りつつ協力する～家事・育児

当時の私の自己像は「集団にいられない人」と「原因不明の虚弱体質」であったから、結婚して専業主婦になったあとは、家の中でよく知るモノや人に囲まれて安定した環境をつくることで、私の生活の秩序を壊す他者を排除し、飽和やパニックになることから逃れ、一人マイペースに健康的な生活ができるだろうと考えていた⁴⁾。

しかし思いのほか、私はまた「できない」思いと体調不良に苛まれていった。そのできなさを振り返ると、やはり3つの項目にあてはまる【表5】。

【表5:主婦業】

	主婦業			
	家事	育児(子1人)	育児(子2人)	母親つきあい
①ノリの秩序に巻き込まれることによる読めなさ	有	無	無	有
②活動・業務の読めなさ(非構造化)	無	無	有	有
③過剰な刺激(音・匂い・動作など)	有	無	有	無

家事と育児は案外、モノにあふれた労働である。食材・食器・衣服・日用品・おもちゃ・本…などのそれぞれが種種雑多に存在している。しかも私以外の家族(夫と子供2人)は、散らかしたり増やしたりするばかりで、整理整頓をしたり減らしたりする作業は、私が「主婦の仕事として」一人で抱えねばならない状態だった(③)。

また子どもとの関係は、初めて私に充実した人とのつながりを感じさせる経験となり、生き甲斐ともなったが、一方で、行動パターンにまだ規範を持たない乳幼児二人をほとんど一人で毎日世話することによって、「泣き続けて止まらない」「突然のけが・病気」「突然の遁走」「物品の破壊」などの読めなさに対する疲労も溜まっていった(②)。

さらに、育児はちっとも家の中に“閉じられたもの”ではなく、子供同士のつきあい＝母親づきあいによって、中高時代と同様の「ノリ」に怯えることになった(①)。もちろん、子供同士のつきあい＝母親づきあいの「常識」には全国一律の規定などなく、そのコミュニティの中で自然発生的に、牽制しながら決まっていくものなので、母親たちの行動は構造化されにくく読みづらい(②)。

それでも、ゆっくりとマイペースで自分なりの方法で対処できれば負担を軽減させられたのだが、そこにダメ押しとして加わったのは、青天井に搾取していく夫の支配的な秩序だった(①)。不景気の中、「社内でもやり手」だと評判の上司が配属され、社内の「おつきあい」が急に強制力を持ち始めてからというもの、夫はみるみるうちに、これまで家庭内で築いてきた私とのルールや規範を守らなくなっていった。

外界の刺激を防いでくれる「家庭」という環境が私に健康的な生活をもたらすだろうという期待はずれ、実際に起きたのは、外からの介入に晒されない「家庭」という密室の中で、夫が支配的に自らの常識を押し付け、私を無能扱いしていくDVの発生だった(詳細は拙書「前略、離婚を決めました」2009)。

離婚後、私は実家に戻った。今の社会が自分にとって障害になっていることを認めた私は、「一人ですべてやらなければ」と思ってきた自分を捨て、新たに家事と育児へのサポートを受けながら生きることに決めた。とはいえ、両親からのサポートが「思いやり」や「家族愛」と言った文脈で行われることも恐れていた。サポートの動機が「愛する孫のため」という美德もけっこうなのだが、それで不満を抱えたり、無理を飲み込んだりしてもらっては、かえって関係の悪化につながる。

私はあくまでも家事援助と子育てに、具体的な職務をこなすイメージで関わってもらおうよう、母に説明した。漠然と「家事・育児の手伝い」とはせず、「夕飯づくり」「就寝中の見守り」など内容を具体的にし、それらが可能かどうかお互いの予定を確認する。無理がある時には遠慮なく断ってもらい別の方法を考える。そんな方法で回している。

ずるずるべつりの慣れ合いではなく、職務の分担でつながっている関係。そのような関係になってから、母と私の関係はとても順調である。「よろしく願い致します」「今日はありがとうございました」これを毎日言い続けることが他人行儀で水臭い関係だとは思わない。むしろお互いの役割が明確になり、少し隙間があいているほうが、感謝と敬意と思いやりを持ち続けられると感じている。

7. 労働への「合理的配慮」

以上の考察から私の労働にとっての「合理的配慮」の条件を整理するならば、「問い返しOKの場」「意味付け介助」「低刺激背景」の三つになるだろう。

「問い返しOKの場」とは、他者との間で意味のわからなさが生じた時に、それを無視するのではなく、問い返して確認することを潔しとする場全体の合意のことである。ノリでノイズをなくそうとするのではなく、ていねいな意味付けをしていくことで、お互いの関係が必要とする構造も立ちあがっていくことになる。

次に「意味付け介助」は、場ではなく個人的アシストをさしており、リアルタイムもしくは事後的に「今の発言はどういう意味?」「あの時の彼の笑い方の意図は何だったと思う?」「意味の擦り合わせ」を手伝ってくれる介助者のことである。そう言うときよく「介助として普遍的な正解を求められても答えられない」と反論されるのだが、普遍性は無用であり、個人的見解でかまわない。ただ私が介助者のことをよく知っている必要はあるかもしれない。この人はうっかり気味、この人は慎重、この人はひねくれ者など、介助者のキャラや思考パターンをふまえた上で、私は意味をすり合わせていくからである。そして「あの人があの事実をこう意味付けした」という情報が、意味のわからないままになっている私の生データの意味付けを絞り込むため、心身への負担が減少するのである。

最後に「低刺激背景」は、モノやヒトの音・匂い・光・動きなどの強度や変化が少ない環境ということである。あらゆる刺激を等しく拾ってしまうことによって、為すべき会話や作業に集中できなくなることは避けたい。

これら3つの処方箋のうち、「問い返しOKの場」「意味付け介助」の二つは、私に限らず、再帰性(不確実性)を増してあちこちに統合不全=隙間を生じた現代社会にとっても、おそらく必要なものだろう。例えば政治学者のウォーレンは、現在のような「ほとんどの社会的相互行為を調整するルール・規範・制度・アイデンティティが争われるようになる」隙間だらけの状態を、「政治」そのものとみなし、「熟議による民主主義」を、対応の一つとして重視する。もはや高まった再帰性を引き戻せない現代において、熟議は、「不確実性の空間を開いたままにしておく規則化された方法を探究する」ための、有力な処方箋だといふのだ⁵⁾。

彼らの言う「熟議」とは、参加者が説明と応答を繰り返すことを通して、他者の観点を自分自身に取り込んだり、自分自身の観点から他者を再解釈したりする過程である。参加者は、以前には用いなかったような表現を用いるようになり、徐々に「説得力がある」と思う言説を立ち上げていく。これは、説明と応答を繰り返してノイズが意味ある情報になっていくプロセスであり、まさに私がコミュニケーションの場において必要としているものだ。

また斉藤純一は、熟議を「合意が形成される過程であると同時に不合意が新たに創出されていく過程でもある」と述べ、意味づけできないノイズの発生は避けられないと説く。その上で、意味づけできないノイズをスルーしない態度が重要だという(田村2008)。これは、熟議がノリになってしまわないためにも重要だ。「よそよそしさ=不合意=隙間」を自覚するほうが、正確さの共有のために言葉を尽くすので、私にとってちょうどいい対話が

まわる。このように、民主主義の言う「熟議」と、私にとっての「合理的配慮」には類似点がある。私の問題は個人に帰責されるべきものではなく、社会全体の問題と通じているのである。

8. おなじでもちがうでもなく

私たちは生きづらさの原因の帰責先を社会か個人かのどちらか一方に見出したいくなりがちだ。しかし「社会が悪い」と主張した瞬間には、自覚の有無にかかわらず、社会に対しての「我々」という共同意識が立ち上がり、それが、「我々」内部にある個人差を無視した同化圧力として働き始める傾向にある。一方、「個人が悪い」と主張した場合は、社会の問題を過剰に個人の中にある原因にすり替える“心理学化”を招く。

例えば、ここまで私は「私の問題が社会の問題である」と強調してきたが、これは個人の問題から社会の問題へと矛先をかえようとする前者寄りの主張だ。その主張を突き詰めた先には、『アスペルガー症候群』を名乗り続けることで、社会に問題があることが隠蔽されてしまう。「社会の問題ならば、『アスペルガー症候群』という名づけはもう必要ない」という結論を招きかねない。しかし私の主張はそれとは異なる。

私は社会の問題を指摘するだけでは不十分だと考えている。なぜなら「とはいえノリに乗ってしまう人」と「やっぱり乗れない自分」の間には、生きにくさの量的な個人差がどうしてもあるからだ。そして、その個人差を過小評価されないために、やはり名付けが必要だと感じているのである。つまり、共通の社会的困難に直面しつつも、我々には個人差があるわけで、ここに「おなじでもちがうでもなく」という緊張関係が生じる⁶⁾。

個人差の過小評価の問題点は、それが熟議の前提となる「私の言葉」を奪うことにある。

誰からも（私からも）見えない透明な存在だった、名付けを得る前の私のように、多数派から身体的条件が量的にかけ離れている人の場合、「確かにこう感じている、こうしたい」といった等身大の感覚や意志が周囲の人に伝わりにくいため、表現する言葉を持たずにいることがある。苦悩の量的な差は見過ごされ、「苦勞しているのは皆同じだから、もっと頑張れ」という同化的まなざしを注がれてしまう。その結果、なんとか同化しようと無理をしまい、不明確な苦しみに漂うばかりで自信を喪失していく。このように過剰適応に向かう時期を私は「第一世代」と呼んでいる。

しかし私は名付けを得ることで、同じ経験を共有する仲間と出会った。この時期を「第二世代」と呼ぼう。彼らは私の等身大の感覚を「わかるわかる！」と無条件に承認した。そして仲間内で共有されている言葉をわけ与えてくれた。この時私は、これまで誰からも見えなかった自分が、確かに在るものとして現れ出てくるのを感じた。苦悩に名前がついたことで、私はようやく、私を語る言葉を持ったのである⁷⁾。

やがて第二世代は、「我々（アスペルガー症候群等）」内部にも違いがあることを知り、「アスペルガー症候群とはこういうことだ」とコミュニティが共有する『まなざし』が、一人ひとりの違い（内部の秩序を乱すノイズ）を見過ごし、再び同化圧力（内部をつなぐノリ）として作用することに気づく。そして、このようなコミュニティ内の同化圧力から逃れるようにして、コミュニティは細分化していく。この時期を「第三世代」と呼ぶ。第三世代

では、自分の特質のうちどの部分が「コミュニティ内で共有される身体的条件」に起因するものであり、どの部分がそうではないかについて洞察を深めることができる。しかしそれと同時に、連帯を失うことによって権力によって操作されやすい『分断された個（新第一世代）』を生む危うさを抱えている。つまり第二世代を捨てて第三世代への移行を急ぐと、また第一世代へ戻ってしまいかねないのである。

私はかつての誰からも見えない、第一世代の私には戻りたくない。だからこそ第二世代の名付けを引き受け続けながら第三世代を歩むことになるだろう。第二世代に軸足を置いて、質的一致と量的不一致に敏感になりつつ他者とのつながりに開かれていくことを切望する時、「熟議」というスタンスは私にとって不可欠なものだと言える。

熟議には即興性の快楽はないかもしれないが、「ノリ」のスピードが見落としてしまう新奇な鉦脈を発見し、こつこつと共に掘り起こす愉しみがある。「私たちは一人ひとり異なっている」「隙間は消えない」という前提で、その隙間に漂う旨味を味わいながら言葉を交わし続けること。それが、社会が私にもたらす“見えない壁”に風穴をあける兆しとなるだろう。

【註】

1) かつての標準品の大量生産を特徴とするフォーディズム型生産システムでは、生産労働は標準化された課業へと細分化され、取替え可能な半熟練労働者だけが必要とされた。しかし、耐久財が一巡したあとに、慢性的な需要不足と新規市場開拓への強迫からなる、現在のポスト・フォーディズム生産システムへ移行し、米国の過剰消費に依存した不均衡な世界経済がやってきた。

エステベス-アベらは、ポスト・フォーディズムにおける各国の生き残り戦略について、図1の4タイプを抽出している(安孫子2008)。つまり、どのような商品を作るかという生産戦略に応じて、必要な社会保障や特殊技能が国ごとに分化したということだ。その結果、特殊技能を持たずに労働市場から排除される人々も生まれた。

ポスト・フォーディズムの経済的な困難の根本にあるのは、耐久財が一巡したうえに、格差による不安から限界消費性向を減らした人々による、慢性的な「需要不足」である。権丈は、1990年代の日本の経済状況を概観し、日本が直面する経済問題の性質は、構造的な需要不足状態にあることを示している。その上で、青木・吉川の経済成長モデルを援用しつつ、このような状況を打破するために必要なのは、ニーズにあった(新規市場として有望な)医療・介護・教育・育児への現物給付による、積極的社会保障政策であると説く(権丈ら 2009)。それが、ポスト・フォーディズムでの均衡の取れた公正な社会の実現になくてはならない、内需主導の経済成長につながるというわけだ。どうやら当事者ニーズをいかに汲み上げるかという需要拡大が先になれば、雇用拡大という供給側の問題は語るができないようである。

図1 社会的保護と技能タイプ

		雇用保護	
		低	高
失業保護	高	産業特殊の技能 ニッチ市場向け高品質製品戦略 例：デンマーク	産業特殊の技能と企業特殊の技能のミックス 多品種高品質生産戦略 例：ドイツ
	低	一般的技能 知識経済戦略 例：アメリカ	企業特殊の技能 多品種大量生産戦略 例：日本

2) 「アスペルガー症候群」概念の輸入が遅れたのはなぜだろう。ここでは「遅れてやってきた労働市場の構造改革」と「犯罪の語られ方の変化」の二点を指摘しておく。

まず労働市場について、濱口桂一郎は日本の雇用政策の変遷を、図2のように整理している(濱口 2009)。

図2 日本の雇用政策の変遷

<p>①自由主義の時代(1910年代半ば～30年代半ば) 自由主義経済政策が基調</p> <p>②社会主義の時代(30年代半ば～50年代半ば) 労働組合が活発に活動して生活給的な年功賃金制が確立</p> <p>③近代主義の時代(50年代半ば～70年代半ば) 政府、経営側主導で同一労働同一賃金と職業能力、職務給を中心とした外部労働市場の確立が目指されていた</p> <p>④企業主義の時代(70年代半ば～90年代半ば) 生活給的な日本的雇用慣行が、職務給的な雇用システムよりも効率的と評価されるようになった</p> <p>⑤市場主義の時代(90年代半ば～2005年) バブルが崩壊し、日本型システムを全否定して新自由主義政策を唯一のモデルとする論調が一世を風靡</p> <p>⑥現在(2005年以降) 格差社会への恐れによる規制強化に逆転</p>

このうち、④によって日本の労働市場の構造は20年ほど延命されたが、その後、労働市場は企業福祉以外のセーフティネットを欠いたままで、柔軟化した。その結果、日本では米英から約20年遅れて、ロスジェネ世代を中心に、労働市場から排除される人々が生まれた。そしてこの時期に一致して、凶悪犯罪を理由付ける名付けとして「アスペルガー症候群」も輸入されることになった。

昨今の犯罪の語られ方について芹沢は、人々の共有するルールが機能しにくくなった現代では、犯罪行為が起きた時に、「なぜ少年はそのような凶悪犯罪を行ったのか」というストーリーをいくら作成してみても、これまでのように多くの人々が共感して納得できる「作品」を紡ぐことができなくなっていると述べている。そのため「統計は少年犯罪の凶悪化を示してはなかった」にもかかわらず、「狂乱めいた騒ぎの末、ついには少年犯罪を理解しようとする姿勢そのものが、社会から失われていき、少年たちは「アスペルガー症候群」などといった「異常性

のレッテルを貼られ、社会から精神医学の世界に追いやられた」のだと指摘している(芹沢 2006)。

また東は、「この社会を運営するためには、もはや法や規範の内面化は役に立たない。多様な市民の共存が私たちの社会の原理だし、そうである以上、価値観や規範意識の差異もそのまま放置するしかない」と述べており、犯罪についても、人々の内面に共有している常識や規範というものを加害者の内面に刷り込むことで強制するのではなく、もはや強制は諦め、外面的に加害者から距離を置き、身を守るというセキュリティの発想がはびこっていることを指摘している(東 2002)。

つまり、社会が共有するルールや規範を喪失した結果、犯罪行為を「不可解」だとしか語れなくなり、人々は加害者の心の中に思いを馳せることをやめ、むしろ被害者の立場になって加害者をモンスター化し、外面で管理して秩序を維持するセキュリティ重視の方向にすすんだ、というわけだ。

3) 既存のアスペルガー症候群という概念が私の概念に置き換わるという意味ではなく、あくまで私個人の説明である。

4) 再帰性を高めた社会は、同時に、「自分自身の側のアイデンティティを再肯定する一方で、他者を中傷し拒絶する」排他的なアイデンティティ同士の衝突の危険性にさらされた「分断された社会」でもある。ドライゼックは、伝統が失われた再帰的な社会だからこそ、かえって排他的な伝統を称揚する原理主義が勃興するという現象を『再帰的伝統化』と呼ぶ(田村 2008)。つまり「再帰的伝統化」は、「再帰的近代化による不安」へのコーピングだということだ。

私が、「他者が介入してこない安定した環境」を作ろうとすることと、この「再帰的伝統化」との間には、おそらく同じような動機があると思うのだが、専門家達はアスペルガー症候群の人々が「他者が介入してこない安定した環境」を求める状況をさして、『こだわりが強い』と否定的に表現する。私には、人々の専門知に対する無根拠な信頼も、「再帰的近代化による不安」へのコーピングという点では変わらないと思えるのだが。

5) 世界はオイルショック以降、福祉国家による市場への規制・介入の限界が明らかになるにつれ、社会統合のあちこちに「隙間」が空き始め、「ポスト国家的統合関係」に突入した(田村 2008)。公的領域(国家)と私的領域(企業)の区分は曖昧になり、いずれの領域も利己的に利潤を追求するようになった。かつては国家的統合を阻むものであった個体間の「差異」は、今ではむしろ資本増大の源泉として尊重され、きめ細やかに管理されている(山下 2008)。

社会の不確実性が高まると、長期的な展望が不透明になるため、金融機関も経済の不安定さから短期的利益を得るようになる。世界規模でモノ、ヒト、カネ、情報の移動の規制がなくなり、移動しにくい労働力(ヒト)よりも、移動しやすい資本(モノ、カネ、情報)にとって有利な制度が世界的に蔓延していき、戦後に確立した「資本と労働の融和」というコンセンサスも消滅しつつある。

レッシングは、隙間を埋めて社会統合を調整するための装置には、「法」「社会的規範」「市場」「アーキテクチャ」の四つがあると述べたが(レッシング 2001)、「社会的規範」が失効しつつある現代は、グローバルな「市場」や「アーキテクチャ」が巨大化し、「万人の万人に対する闘争(ホップズ)」と「分断統治」が徹底されつつあるとも言える。

このような状況に抵抗するために、ここ 20 年間の世界の国々では、市場経済の制度的調整よりも、いわば五つ目の統合装置としての民主主義的討議、すなわち政治的なものがより重要になってきていると、ポントウソンは言う(安孫子 2008)。例えば、資本と労働の討議システムが、国レベルで組織されているデンマークでは、労働市場の柔軟性を高めながら、失業保護や就労支援といった形でのセイフティネットを両立させる「フレキシキュリテ

イ」と呼ばれる積極的な労働政策が整っており、世界的に注目されている(権丈 2009)。逆に、民主主義に反する、政党のカルテル化や争点隠しが起きやすい二大政党制をとっている国々は、社会保障が充実しておらず、格差が大きい傾向にあるという(吉田 2009)。

6) 民主主義と一口に言っても様々な形態がある。中でも、熟議を重ねて全員の合意を目指すのか(熟議民主主義)、それとも安易な合意志向を避けて最後まで議論を戦わせ、最終的には多数決などで聴衆の一部の意見を採用するのか(闘技民主主義)という区別が重要な論点になっている。

「闘技民主主義」を提唱しているムフは、少数派や社会的弱者に特有のこの緊張関係を重視している。彼女は「あらゆる合意は必然的に排除という行為に基づいている」と述べ、合意を目指す熟議という概念を批判する。そして「完全な合意であるとか、調和的な集合意思であるとかいった理念は放棄されなければならない、恒常的な紛争と敵対関係とが受け容れられなければならないのである」としている(田村 2008)。

7) マンスブリッジは、そのような局所化した連帯を、より大きな権力に対して闘うための対抗思想の成長を可能にする拠点として認め、「抵抗の飛び地」とよぶ(田村2008)。この「抵抗の飛び地」は、私の言う「第二世代」と近いだろう。

【参考・引用文献】

- ・安孫子誠男 2008「福祉・生産レジーム論をめぐる争点」公共研究 第4巻第4号
- ・綾屋紗月・熊谷晋一郎・伏見憲明 2009「鼎談 『発達障害当事者研究』を読んで」精神看護
- ・東浩紀 2002「情報自由論」中央公論
- ・濱口桂一郎 2009「雇用政策の転換」人と国土21
- ・権丈英子 2009「フレキシキュリティを考える」三田評論
- ・権丈善一、権丈英子 2009「年金改革と積極的社会保障政策—再分配政策の政治経済学Ⅱ」慶應義塾大学出版会
- ・木村祐子 2008「少年非行と障害の関連性の語られ方：DSM 型診断における解釈の特徴と限界」人間文化創成科学論叢
- ・厚生労働白書 1983, 1997
- ・ローレンス レッシング 2001「CODE—インターネットの合法・違法・プライバシー」翔泳社
- ・内藤朝雄 2009「いじめの構造—なぜ人が怪物になるのか」講談社
- ・リチャード・セネット 2006「不安な経済／漂流する個人」大月書店
- ・芹沢一也 2006「ホラーハウス社会」講談社
- ・高岡健 2007「自閉症の原点」雲母書房
- ・田村哲樹 2008「熟議の理由—民主主義の政治理論」勁草書房
- ・ウルリッヒ ベック, スコット ラッシュ, アンソニー ギデンズ, 1997「再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理」而立書房
- ・山下範久 2008「現代帝国論—人類史の中のグローバリゼーション」日本放送出版協会
- ・吉田徹 2009「ニッポンの民主主義」日本を変える「知」光文社